



久保田 信

36

ヒクラゲ



アンドンクラゲを大形にしたようなヒクラゲ (河村真理子さん撮影)

ヒクラゲは刺胞毒が強い大型の箱形クラゲ類の一種である。名前の通り、刺されると体に火が付いたように痛むという。田辺湾や周辺ではめったに遭遇することはない、出現もほとんどが冬季である。

とから海水浴で刺されることはまずない。いままでの採集例はたった2個体だけである。

一つは、2000年6月27日の昼間、白浜町袋湾奥の漁港内の表面近くで、遊泳中のヒクラゲ(傘高9センチ)が採集された記録がある。普段は夜行性だがこの日の天候は曇りだったので出現したのかもわからない。しかし、季節が夏なので珍しい例だ。

その次は05年12月25日で、季節は合点が行くが、これも昼間に白浜町の南海棧橋付近を遊泳中に採取された。少し

体が傷んでいるが、スケール付きの画像で示したように、このヒクラゲは大型で成熟していた。

白浜町から少し離れるが、10年1月11日午前10時22分、みなべ町のダイビングスポットで、胃袋に1匹の魚を取り込んだヒクラゲが撮影された。その日も曇天で水中も暗く、透明度は8センチ程度。

このヒクラゲの大きさは人の握りこぶし程度の傘高11センチで、傘幅が最大7.5センチ程度と撮影者により目視された。4本の毒の強い触手は、30センチ以上に伸びていたそうである。自然状態で胃腔内に捕獲したばかりの魚を持ったヒクラゲの報告例はないので珍しい記録となった。

その魚は写真からヒメジの稚魚であろうと推定された。ヒクラゲは夜行性であるので捕食した稚魚が胃腔内にまだ原形をとどめていることは捕食後から時間の経過があまりないのであろう。捕食時間は明け方前後であった可能性がある。(京都大学准教授)